

(様式3)

農業研究成果情報

No. 792 (平成 29 年 5 月) 分類コード 02-09 熊本県農林水産部

### 加温栽培ヒリュウ台「肥の豊」における若木期の樹冠拡大のための着果程度

若木期で樹冠拡大を優先する場合の単位樹冠容積( $\text{m}^3$ )当たりの着果数は10果程度が適当である。また、目標樹高・樹幅の8割程度に達した樹では、13果程度にすることで収量が多く、3L・4L階級の果実割合が高い。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者: 川端義実)

#### 研究のねらい

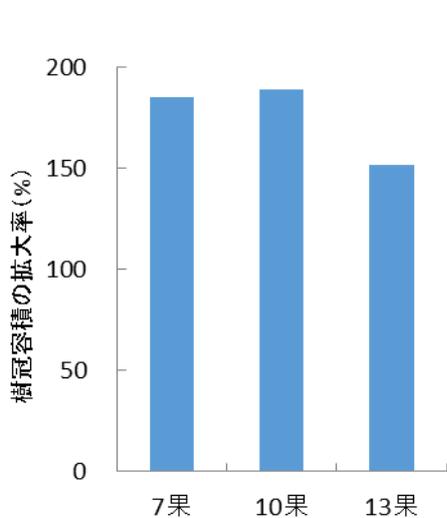
加温栽培のヒリュウ台「肥の豊」は、従来のカラタチ台「不知火」に比べ、高品質果実が生産されやすいことから、県内で栽培面積が増加しつつあるが、若木期の着果法が確立されていない。そこで、着果させながら樹冠拡大を図るための若木期の着果程度を明らかにする。

#### 研究の成果

1. 樹冠容積の拡大率は、単位樹冠容積 ( $\text{m}^3$ ) 当たり着果数が7果区と10果区では同程度で、13果区は最も小さい(図1)。
2. 単位樹冠容積当たりの収量は、着果数が多い区ほど多い(図2)。
3. 果実階級は、着果数が少ない区ほど大玉果率が高い(図3)。
4. 翌年の1結果母枝当たりの総花数は、単位樹冠容積当たりの着果数が多い区ほど少ない(表1)。
5. 単位樹冠容積当たりの着果数が少ない区の果実品質は、大玉で糖度とクエン酸濃度はやや低い傾向にある(データ略)。

#### 普及上の留意点

1. 本成果は、加温栽培ヒリュウ台「肥の豊」4～5年生樹を用いて、2月上旬から15°Cで加温開始し、満開が3月20日頃であった作型の結果である。
2. 摘果は6月中旬に単位樹冠容積( $\text{m}^3$ )当たり18果程度の粗摘果を行い、7月中旬に処理区毎の着果数に仕上げ摘果を行った。主枝・亜主枝等の樹冠拡大させたい枝には着果させず、樹冠内部を中心に着果させた。
3. 目標樹高・樹幅は植栽距離で異なり、3.5m×3.5mで植栽した場合は、目標樹高2.3m・目標樹幅3.3m程度が目安となる。
4. 単位樹冠容積当たりの着果数が7果および10果では、着花過多(表1)となるため着花を減らす対策が必要である。着花抑制対策としては、結果母枝の切返しが有効であり、12月～2月上旬に結果母枝の先端から1/3～1/4を切返すことで着花を抑制できる。

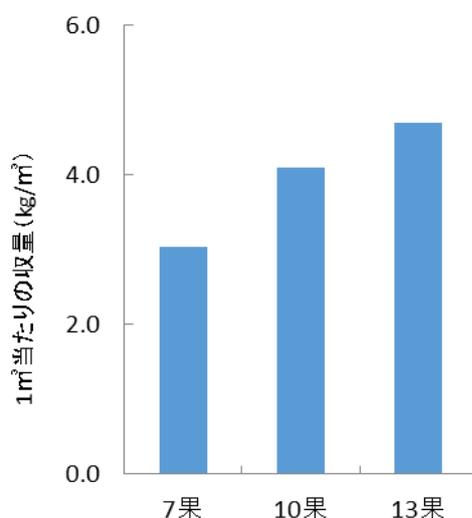


単位樹冠容積 (m<sup>3</sup>) 当たり着果数

図1 加温栽培ヒリュウ台「肥の豊」における着果程度別の樹冠容積拡大割合

注1) 2014年と2015年の平均値

注2) 樹冠容積拡大割合=収穫後の樹容積/摘果前の樹容積×100



単位樹冠容積 (m<sup>3</sup>) 当たり着果数

図2 加温栽培ヒリュウ台「肥の豊」における着果程度別の収量

注1) 2014年と2015年の平均値

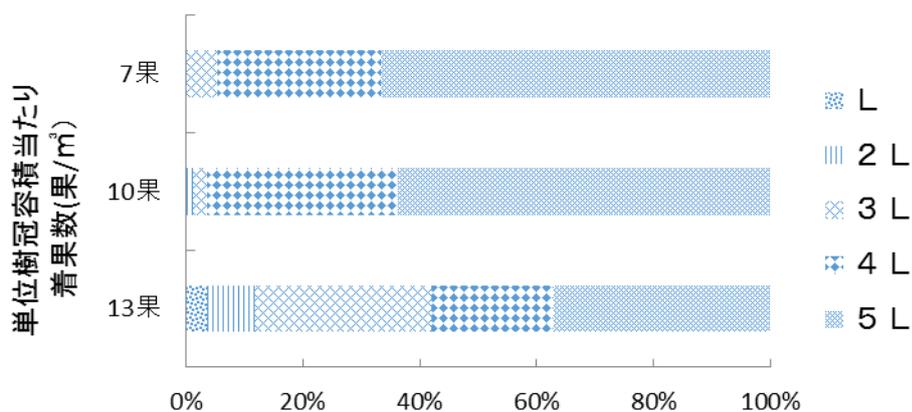


図3 加温栽培ヒリュウ台「肥の豊」における収穫時の果実階級割合 (2015)

表1 加温栽培ヒリュウ台「肥の豊」における着果程度の違いが翌年の結果母枝長と着花に及ぼす影響(2016)

処理 (着果数/m <sup>3</sup> )	結果母枝当たり				
	結果母枝長	有葉総状花	有葉単生花	直花	総花数
個	cm	本	本	個	個
7	17.4	7.1	4.0	0.1	30.1
10	15.9	4.4	3.0	0.0	18.9
13	11.3	0.5	2.7	0.0	5.6